

千葉県東海岸部の ことばの世代差に関する一考察 —文末表現形式—

永島 寛子

1. はじめに

ことばは変化をするものである。「通時的に見ればどの言語にもそれぞれの言語史があり、共時的に見ればそれぞれに様々のレベルでバリエーションが観察される」(真田他, 1997:91)とされている。

ことばの変化を通時的に捉える方法として「言語地理学¹」があり、共時的に捉える方法として「社会言語学²」がある。「社会言語学」の研究領域として、ことばのバリエーション研究がある。ことばのバリエーションとは、「同じ内容をいうための異なった言い方のことである。例えば、「かたつむり」のことを、地域によって、カタツムリやマイマイ、デンデンムシなどと呼ぶことがあるが、これら三つのことばは互いにバリエーションの関係にあるといえる。また、「駅」のことをエキという人もあればテイシャバという人もあるが、これもバリエーションの研究である」(渋谷, 1998:100)。つまり、話し手が生まれ育った地域や年齢、そのことばを使う場面といった属性に注目するのがバリエーションの研究である。

「ことばの変異に関係する社会的な変数³は様々あるが、その中でも、年齢差は最も重要な変数の一つである」(真田他, 1997:17)、「生きのいい、進行中の言語変化を確実に扱うためには、若い世代をも含め、年齢差を考慮に入れる必要があった」(井上, 1982:33)という指摘があるように、ことばと年齢は互いに関係しあっている。

そこで、本研究では、自分が生まれ育った千葉県東海岸部のことばの世代差⁴を「文末表現形式」の側面から捉えることにし、主に「べ」の意味と接続の

仕方について考察する。「ことばは一共時態においては、個人的な変数として、また地理的・社会的(およびその他の)言語差として反映される」(井上, 1985a:52) という指摘に従い、社会言語学的方法論を用いて、共時的な観点から千葉県東海岸部のことばの過去と将来を考察していくことを本研究の目的とする。

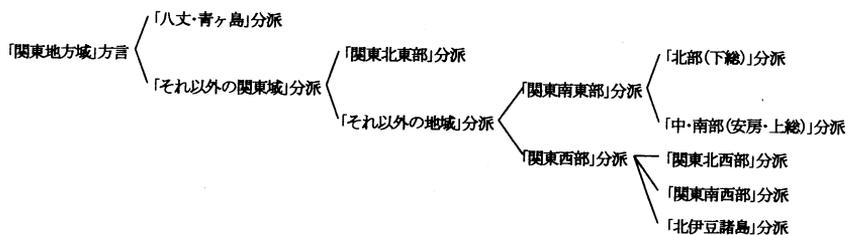
本研究が示す千葉県東海岸部とは、行政区画でいう太平洋側の海上郡・匝瑳郡・山武郡・長生郡・夷隅郡・安房郡の六つの郡にある市町村である。そして、千葉県東海岸部のことばの現状を捉えるために、選択肢式のアンケート調査⁵を行った。

2. 千葉県のことば

2.1 関東方言の中における千葉方言の位置付け

「千葉県東海岸部のことば」について理解を深めるため、千葉県のことばがどのように位置付けられているのかを大橋(1981:477, 1992:192-193)の方言区画を参考に見ていくことにする。

千葉方言は、大橋(前掲)の方言区画によると、「関東地方域」方言の「関東南東部」分派⁶(千葉県)に分類されている(図1)。



(図1)

本研究の「千葉県東海岸部」は関東方言の中に「関東南東部」分派の「北部(下総)」分派の一部と「中・南部(安房・上総)」分派に位置付けられる。

2.2 千葉県のことば

東京都に隣接する千葉県のことは、「千葉県西北部の東京に隣接する市川市から千葉市に至るいわゆる京葉工業地帯は、県内でも共通語化が著しく進み、日常の言語生活においても共通語使用が一般的な共通語主流社会である」(篠崎, 1995:62)、という指摘がある。しかし、千葉県東海岸部は、東京から距離的に遠く、「千葉県は、房総半島の南部、東辺方面に行くにしたがって、古い方言地層になっているし、銚子方面の下総東部がまたかなり古い地層の一面を作っている(大橋, 1981:471)、との指摘もあるように、共通語化が進む一方で、まだ古い言い方が残存していると考えられる。

2.3 千葉県東海岸部のことば

本研究の「千葉県東海岸部」(海上郡・匝瑳郡・山武郡・長生郡・夷隅郡・安房郡)の六つの郡にある市町村に見られることば(文法的側面)の特徴を見ていくことにする。

2.3.1 文法

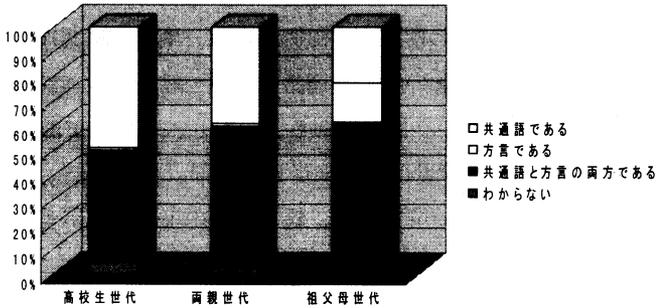
千葉県東海岸部に見られる文法面の特徴的なものは意志や推量を表すときに用いる助動詞「べし」の変化した「べ」や「ぺ」である。しかし、これらは千葉県東海岸部のみに見られるものではなく、千葉方言の特徴であると同時に、関東方言の特徴でもある。

千葉県東海岸部では、「意志」、「推量」、「勧誘」、「念押し」を表すときに「べ」や「ぺ」を用いている。千葉県中・南部では、「ぺ」は推量を表し、「べ」は意志・勧誘を表すと意味上の使い分けが指摘されている⁷。しかし、方言では、それらの意味上の使い分けはされていないという指摘もある⁸。

2.3.2 千葉県東海岸部の現状

被調査者の言語意識を調査するため、フェイスシート⁹の部分で、「ふだん使っていることばは共通語だと思いますか」という質問をした。

Q10ふだん使っていることばは共通語だと思いますか。



このグラフから、高校生世代では、共通語を使用する人が多く、次いで、共通語と方言の両方を使用している人が多い。両親世代では、共通語と方言の両方を使用している人が最も多かった。次に多かったものは、共通語のみを使用している人であった。祖父母世代では、両親世代と同様、共通語と方言の両方を使用している人が多かった。次に多かったものは、共通語のみを使用している人であった。しかし、方言を使用するのは、高校生世代と両親世代と異なり、祖父母世代が多かった。

つまり、共通語を使用しているのは、若年層ほど多く、方言を使用しているのは、高齢層ほど多いということが考えられる。しかし、共通語のみを使用している人ばかりでなく、方言を使用している人も同程度見られた。したがって、千葉県東海岸部では、共通語化が進んでいる一方で、方言も残存しているということができると考えられる。

3. 調査の計画と実施

3.1 調査方法

千葉県東海岸部にある高等学校のうち七校の生徒とその家族(父親あるいは母親、祖父あるいは祖母)の三世代についてアンケート調査をした¹⁰。被調査者の選定は各高等学校の先生方に任せた。ただし、三世代が一緒に住んでいる生徒を選んでもらうようにした。収集したデータ数は、高校生世代が72

名、両親世代が73名、祖父母世代が71名の合計216名である。調査は1998年7月から1998年10月にかけて行った。

3.2 調査対象

千葉県東海岸部にある高等学校のうち、以下の七校を選定し、調査を行った。

- ・ 千葉県立銚子高等学校(千葉県銚子市)
- ・ 千葉県立匝瑳高等学校(千葉県八日市場市)
- ・ 千葉県立成東高等学校(千葉県成東町)
- ・ 千葉県立東金高等学校(千葉県東金市)
- ・ 千葉県立九十九里高等学校(千葉県九十九里町)
- ・ 千葉県立長生高等学校(千葉県茂原市)
- ・ 千葉県立安房水産高等学校(千葉県館山市)

3.3 調査項目・調査内容

「表現法」の項目で、文末表現形式の世代差を捉える。調査をした文末表現形式は、(1)意志表現(～う)、(2)推量表現(～だろう)、(3)勧誘表現(～ようよ)、(4)待遇表現(～なさい、～ください)、(5)疑問表現(～だろうか)、(6)義務表現(～なければならない)、(7)念押し表現(～じゃないか、～でしょ)の七つがそれに該当する。しかし、本研究で扱う文末表現形式は「べ」や「っぺ」を用いたものであるため、(1)意志表現、(2)推量表現、(3)勧誘表現、(7)念押し表現の四つである。そして、接続する品詞や活用の種類、活用形による使い分けがあるかどうかを見るため、動詞(五段活用動詞、上一段活用動詞、下一段活用動詞、サ行変格活用動詞)、名詞、形容詞について調べることにした。

質問方法は、それぞれの項目について、回答するであろうと考えられる語形をいくつかアンケート用紙に載せておき、「自分自身が使うもの」「周りの人が言っているのを聞いたことがあるもの」「聞いたことがないもの」のいずれかをマークしてもらうという選択肢式のものである。また、載せておいた語形以外の言い方があるときは、その他の欄に記入をしてもらった。

「表現法」は、以下のものを質問した。

(1) 意思表現

1. 「(ひとりごとで)友達に電話をしよう。」(サ行変格活用動詞)
2. 「(ひとりごとで)明日の朝は5時に起きよう。」(カ行上一段活用動詞)
3. 「(ひとりごとで)駅まで歩いて行こう。」(カ行五段活用動詞)

(2) 推量表現

4. 「太郎はもうそろそろ起きるだろう。」(カ行上一段活用動詞)
5. 「明日は天気が良いだろう。」(形容詞)
6. 「明日は雨だろう。」(名詞)

(3) 勧誘表現

7. 「花火をしようよ。」(サ行変格活用動詞)
8. 「テレビを見ようよ。」(マ行上一段活用動詞)
9. 「いっしょに行こうよ。」(カ行五段活用動詞)

(4) 待遇表現

10. 「遠慮をしないで食べなさい。」(バ行下一段活用動詞)
11. 「遠慮をしないで食べてください。」(バ行下一段活用動詞)

(5) 疑問表現

12. 「明日は晴れるだろうか。」(ハ行上一段活用動詞)
13. 「今夜は雨だろうか。」(名詞)

(6) 義務表現

14. 「この仕事をしなければならない。」(サ行変格活用動詞)

(7) 念押し表現

15. 「事故があったじゃないか。」(ラ行変格活用動詞)
16. 「それで良いじゃないか。」(形容詞)
17. 「それではだめじゃないか。」(形容動詞)
18. 「明日は早く起きるのでしょ。」(カ行上一段活用動詞)

3.4 集計方法

216名のアンケートの結果をコーディング¹¹⁾し、世代別(高校生の世代、両親の世代、祖父母の世代)に集計した。そして、実数をパーセントで表した¹²⁾。

4. 調査結果

(1) 意志表現

1. 「(ひとりごとで)友達に電話をしよう。」

「しべ(連用形+べ)」は、祖父母世代(80%)に最も多く、両親世代(71%)、高校生世代(44%)になるにつれて使用者が減少しており、衰退の傾向にある。「しべ」に代わっている語形は「するべ(終止形+べ) (高校生世代70%、両親世代55%、祖父母世代63%)や「すんべ(終止形+べ)」(高校生世代82%、両親世代67%、祖父母世代51%)である。

2. 「(ひとりごとで)明日の朝は5時に起きよう。」

「おきべ(連用形+べ)」は、祖父母の世代(89%)の使用者が最も多く、両親世代(82%)、高校生世代(47%)になるにつれて使用者が減少しており、衰退の傾向にある。「おきべ」に代わっている語形は「おきるべ(終止形+べ)」(高校生世代68%、両親世代55%、祖父母世代49%)や「おきんべ(終止形+べ)」(高校生世代67%、両親世代52%、祖父母世代42%)である。

3. 「(ひとりごとで)駅まで歩いて行こう。」

「いくべ(終止形+べ)」(高校生世代42%、両親世代47%、祖父母世代68%)の語形が主流であり、「いんべ」(高校生世代14%、両親世代38%、祖父母世代42%)や「いっぺ」(高校生世代13%、両親世代23%、祖父母世代25%)はほとんど使用されていない。

(2) 推量表現

4. 「太郎はもうそろそろ起きるだろう。」

意志表現と同じ語形である「おきべ(連用形+べ)」は、推量を表すときにも使用されていた。推量表現の「おきべ」も意志表現と同様、衰退の傾向にある(高校生世代39%、両親世代81%、祖父母世代70%)。そして、「おきるべ(終止形+べ)」(高校生世代79%、両親世代70%、祖父母世代58%)もまた推量を表すときに使用されており、「おきべ」に取って代わられている語形であると考えられる。共通語の影響を受けて生じたと考えられている「おきるだんべ」(高校生世代11%、両親世代30%、祖父母世代35%)や「おきる

だっぺ」(高校生世代19%、両親世代58%、祖父母世代59%)の使用者はあまりいなかった。「じゃん」を用いた「おきるんじゃん」の使用は、高校生世代に多かった(高校生世代81%、両親世代59%、祖父母世代35%)。

5. 「明日は天気が良いだろう。」

「いっぺ(えかっぺ)(連用形+ペ)」は、祖父母世代(80%)と両親世代(81%)の使用者が多く、高校生世代(63%)では使用者が減少しており、衰退の傾向にある。「いっぺ(えかっぺ)」に代って使用されている語形は、「いーべ(終止形+ペ)」(高校生世代76%、両親世代89%、祖父母世代69%)である。

6. 「明日は雨だろう。」

「あめだんべ」(高校生世代5%、両親世代4%、祖父母世代13%)はあまり使用されていない語形であるが、「あめだっぺ」(高校生世代28%、両親世代46%、祖父母世代76%)は多く使用されている。「あめだっぺ」は福島県南部から千葉県の太平洋岸に連続して見られる(井上, 1985b:186)と指摘されている。「あめじゃん」は、高校生世代の使用者が最も多かった(高校生世代78%、両親世代32%、祖父母世代4%)。

(3) 勧誘表現

7. 「花火をしようよ。」

意志を表すときと同じ語形である「するべ(終止形+ペ)」(高校生世代68%、両親世代67%、祖父母世代48%)や「すんべ(終止形+ペ)」(高校生世代79%、両親世代62%、祖父母世代45%)は、高校生世代の使用者が多く、意志の場合と同様の傾向を示している。祖父母世代と両親世代では、その他の回答として意志表現と同じ語形の「しべ(連用形+ペ)」¹³が見られたが、高校生世代では見られなかった。

8. 「テレビを見ようよ。」

「みべ(連用形+ペ)」は、祖父母世代(77%)の使用が最も多く、両親世代(73%)、高校生世代(53%)になるにつれて使用者は減少し、衰退の傾向にある。「みべ」に取って代っている語形は、「みるべ(終止形+ペ)」(高校生

世代69%、両親世代66%、祖父母世代56%)や「みんな(終止形+ベ)」「高校生世代81%、両親世代58%、祖父母世代38%)である。

9. 「いっしょに行こうよ。」

意志を表すときと同様、「いくべ(終止形+ベ)」「高校生世代47%、両親世代47%、祖父母世代65%)が主流であった。高校生世代で、「いこべ(未然形+ベ)」という語形がその他の回答として見られた。しかし、この語形は意志表現には見られなかった。井上(1985b:185)では、力行変格活用動詞「来る」が意志を表すときに、神奈川付近で「コベ」という語形があることが指摘されている。

(7) 念押し表現

15. 「事故があったじゃないか。」

念押しを表すときにも「べ(っぺ)」を用いた「あったっぺ(文を終止させる形+ベ)」という言い方が見られた。この語形は、祖父母世代に最も多く(72%)、両親世代(48%)、高校生世代(29%)になるにつれて減少しており、衰退の傾向にある。高校生世代は「じゃん」を用いた「あったじゃん」という言い方をしている(高校生世代85%、両親世代44%、祖父母世代13%)。

16. 「それで良いじゃないか。」

推量を表すときと同様、「いっぺ(連用形+ベ)」「高校生世代71%、両親世代88%、祖父母世代82%)は衰退の傾向にある。高校生世代は「じゃん」を用いた「いいじゃん」を使用している(高校生世代89%、両親世代57%、祖父母世代15%)。「いいじゃん」が若い世代で使用者を増やしていることは井上(1985c:261)でも指摘されている。

17. 「それではだめじゃないか。」

15. 「事故があったじゃないか。」と同様、「だめだっぺ(文を終止させる形+ベ)」という語形が祖父母世代(86%)に多く見られ、両親世代(45%)、高校生世代(33%)になるにつれて減少しており、衰退の傾向にある。高校生世代は「じゃん」を用いた「だめじゃん」を使用している(高校生世代90%、両親世代56%、祖父母世代8%)。

18. 「明日は早く起きるのでしょ。」

推量表現にも見られる語形の「おきるだっぺ」(高校生世代8%、両親世代14%、祖父母世代38%)や「おきんだっぺ」(高校生世代14%、両親世代30%、祖父母世代38%)が使用されているが、衰退の傾向にある。その他の回答として、意志と推量を表すときと同様の「おきっぺ」も両親世代と祖父母世代でそれぞれ一例ずつ見られた。

5. まとめ

千葉県東海岸部でも意志、推量、勧誘、念押しを表すときに、方言での言い方で「べ」や「っぺ」が用いられていた。「べ」の接続の仕方は、活用の種類と活用形によって異なる。

上一段活用動詞、下一段活用動詞、サ行変格活用動詞の場合、「べ」の接続の仕方は連用形接続(「連用形+べ」と終止形接続(「終止形+べ」)の二通りが見られた。しかし、連用形接続(「連用形+べ」)は衰退の傾向にあり、それに代わって終止形接続(「終止形+べ」)が普及してきている。形容詞の場合も同様の傾向が見られた。しかし、五段活用動詞の場合、「べ」の接続は終止形接続のみで、連用形接続は見られなかった。

共通語の影響を受けて意志と区別するために生じたと考えられている推量を表す「だんべ」や「だっぺ」を用いた言い方がある。例えば、「行こう(意志)」と「行くだらう(推量)」が「いくべ」と「いくだんべ」と表現される。

「だんべ」や「だっぺ」は、動詞、形容詞の終止形、名詞に接続する。特に、「動詞+だんべ」で表される推量表現は、東京に隣接する地域に見られるので、東京から離れている千葉県東海岸部ではあまり見られなかった。しかし、「名詞+だんべ」は「動詞+だんべ」よりも多く使用されていた。また、「だっぺ」という言い方は「だんべ」よりも浸透していた。特に、「名詞+だっぺ」という形は多かった。これは、「だんべ」や「だっぺ」がもともと名詞に付く語形であったからである。かつては名詞に付いていたものが、動詞や形容詞に付くようになり、意志と推量を区別するようになった。

東京に隣接する地域で推量を表すときに「だんべ」や「だっぺ」を用いている

のは、共通語の影響を受けて方言においても意志と推量を区別する方向にあるからである。千葉県東海岸部で「だんべ」や「だっぺ」があまり用いられないのは、方言において意志と推量を区別使用としていないからであると考えられる。そして、千葉県東海岸部では、意志と推量の区別だけではなく、勧誘、念押しにおいても同じ語形が使用されている。つまり、千葉県東海岸部では、共通語化が進んでいる一方で、方言では意味による語形の使い分けがされていないといえることができる。

千葉県東海岸部では全体として、方言での言い方が衰退し、共通語での言い方が普及してきている傾向が見られた。しかし、方言での言い方が全て衰退してしまうというわけではない。

井上(1998:197)では、ことばは変化することにより、文法的活用が単純になること、意味の区別が明確になることなどを指摘している。つまり、ことばは単純な方向へと変化をしていく。したがって、方言内部でも単純な方向へと変化をしていると言える。例えば、今回の調査の文末表現形式では、「べ」の接続の仕方が五段活用動詞以外では、連用形接続から終止形接続へと移行している傾向が見られた。終止形接続になると、文を終止させる形に「べ」を付けるだけなので、連用形接続よりも単純な方向に向かっているといえることができる。

今回の調査から、千葉県東海岸部において衰退の傾向にあるもの、変化の途中にあるもの、新しく入ってきたものを確認することができた。「年齢差として見えている小さな言語現象は、過去から連続して続いている大規模な言語変化の一環として捉えることができる」(井上, 1998:199)という。今後は、千葉県東海岸部におけることばの共時的変化をもとに、通時的変化を捉えていくことを最終的な目的としたい。

注

- 1 言語地理学は、「言語変化の跡と法則を明らかにすることを目的」とし(柴田, 1963:143)、「現代の話しことばの地域的変種を材料に言語史を推定・構成する方法」である(柴田, 1969:490)。
- 2 社会言語学は、「社会の中で生きる人間、乃至その集団とのかかわりにおいて各言語現

象あるいは言語運用を捉えようとする学問である」(真田他、1997:9)。

- 3 バリエーションのこと。「現在の社会言語学の中では「バリエーション」ということばと「変数」ということばが互換性のあるほぼ同義のことばとして用いられている(真田他、1997:146)。
- 4 本研究でいう「世代」は、「親の代」、「子の代」などの意味である。しかし、「世代」ということばは、広義には、社会を構成する一定の年齢層(通常30年)の人々ないしはその年齢帯を指す。狭義には、出生期を同じくし、歴史的体験を共有することによって類似した精神構造と行動様式を指す一群の同時代者をいう(『社会学小事典』)。
- 5 アンケート調査では、文末表現形式だけでなく、若者ことばや方言についても調査をした。
- 6 大橋(1981:488)によると、ここで「分派」ということばを用いているのは、関東地方域の方言について、それがどのような方言単位の張り合いによって支えられているのかを明らかにするために、単なる平面的・人為的な「区画」「区域」を意味するものではなく、歴史的・時間的なものの帰結としての空間(単位方言域)として捉えるためであるからであるという。
- 7 大岩(1959, 641)、大島(1973, 296-297)、平山(1997, 49-62)。
- 8 伊藤(1983, 397)。
- 9 調査対象の経歴に関わる項目。元来、はじめのページにあったからフェイスといった(井上, 1994:189)。本研究では、経歴以外のことについても聞いた(アンケートのフェイスシートのQ8からQ12までを参照)。Q10で「ふだん使っていることばは共通語だと思いますか」という質問をした。
- 10 しかし、高等学校の場合、様々な地域から生徒が集まってきているので、特定の市町村に住んでいる生徒とその家族を対象とすることはできなかった。
- 11 すべての回答に対して数字のコードを与えること(米田, 1995:37)。
- 12 使用しなかったが、地域別の集計もした。その際、行政区画による郡別に分類した。
- 13 「しべよ」と終助詞を付けて表す回答も見られた(2例)。

引用文献

- 伊藤一也(1983)「千葉方言の文法—山武方言の名詞・動詞の形態論」『琉球方言の周辺のことば』
- 井上史雄(1982)「言語変化と社会言語学」月刊『言語』11-10 大修館書店
- 井上史雄(1985a)「地域差の実態—北海道浜言葉—」『新しい日本語—《新方言》の分布と変化』4 明治書院
- 井上史雄(1985b)「現代東日本のべいの分布と変化」『新しい日本語—《新方言》の分布と変化』4 明治書院
- 井上史雄(1985c)「東日本の《新方言》」『新しい日本語—《新方言》の分布と変化』4 明治書院
- 井上史雄(1994)「アンケート調査を行う」『日本語学 臨時増刊号』明治書院
- 井上史雄(1998)『日本語ウォッチング』岩波新書

- 大岩正伸(1959)「千葉県館山市竹原(旧九重村)」『日本方言の記述的研究』
- 大島一郎(1973)「千葉県山武町方言の語法」『東京都立大学人文学報』96
- 大橋勝男(1981)「関東地方方言分派論」『方言学論叢1 方言研究の推進』三省堂
- 大橋勝男(1992)『関東地方域についての方言地理学的研究 第4巻』桜楓社
- 真田真二・渋谷勝巳・陣内正敏・杉戸清樹(1997)『社会言語学』桜楓社
- 柴田武(1963)「オタマジャクシの言語地理学」『国語学』53 武蔵野書院
- 柴田武(1969)「言語史を構成する手がかり」『言語地理学の方法』筑摩書房
- 渋谷勝巳(1998)「社会言語学のキーテーマ2 ことばのバリエーション」月刊『言語』27-2
大修館書店
- 平山輝男(1997)『千葉県のことば』明治書院
- 米田正人(1995)「言語データを統計処理する」月刊『言語』24-5 大修館書店